

2024年6月9日（聖霊降臨後第3主日、特定5、B年）

牧師メッセージ

「見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」

（マルコによる福音書3：20 - 35）

司祭ヨセフ太田信三

悪霊を追い出すイエスのことを、身内の人々は「気が変になっている」と言い、律法学者たちは「ベルゼブルに取りつかれている」「悪霊の頭の力だ」などと言いました。両者ともイエスが奇跡を行ったことは認めています、イエスの真実の姿を見誤っています。

身内という関係性、律法学者という権威的立場、いずれも人の目を曇らせるものの象徴といえます。人は身内のこととなると、他に対してとは違う態度、判断をしてしまうことがあります。また、律法学者たちは自分たちの権威が脅かされないように、という条件ありきでイエスを評価しなければならなかったのでしょうか。かように立場や関係性次第で、人は簡単に目が曇ってしまうものです。人の目を曇らせるものでもっとも身近なもの、それが母や兄弟姉妹、つまり家族と言えるかもしれません。だからこそイエスは、「神の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ。」と言われたのです。この言葉は文脈無く聞くと、とても非常識で冷徹な言葉のようにすら感じられます。しかしよくよく考えれば、これはとても愛情深い言葉です。ある人にとってこの言葉は解放の言葉に他ならないでしょう。血縁的な家族に囚われ、多くの人が、ことに子どもたちが苦しんでいる現実をわたしたちは知っています。イエスはそのような血の家族に囚われるのではなく、わたしたちが神に結ばれることで神の家族、それはすなわちすべての命を祝福なさった神に繋がれた家族であり、命を祝福し合う家族にされているのだと告げているのです。もちろん、このことは血縁的な家族関係を単純に否定しているわけではありません。それが目を曇らせ、それこそ神の祝福から命の尊さを奪うものであってはならないと告げているのです。それゆえイエスは、「私の母、私のきょうだいとはだれか」と問いかけ、人々の目を曇らせるものに気付かせようとなさったのです。

今日の使徒書でパウロが言うように、私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注がなければなりません。今日の福音書は、「目に見えるもの」がいかに大切なことを見えなくしてしまうのかを伝えています。イエスはその働きを始める時に洗礼を受けました。この時イエスに聖霊が降り、その聖霊がイエスを導き、そしてイエスは奇跡を行います。イエスを導き、その働きを支えたのは、目に見えるものに囚われては見えない霊の働きだったのです。わたしたちも目に見えるものにばかり囚われ、目に見えない聖霊の働きに目を注がなければ、イエスとは何者か、大切なものは何か見失ってしまいます。